



藤本義一



文藝春秋



珍魂商才

昭和四十五年十一月三十日 第一刷

定価 六〇〇円

著者 藤本義一

発行者 檜原雅春

発行所

株式会社 文藝春秋

東京都千代田区神田尾井町三

電話東京二六五局一二一一

郵便番号一〇二

印刷 凸版印刷

製本 加藤製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1970 Giichi Fujimoto

Printed in Japan

目次

プロローグ	第 一 幕	第 二 幕	第 三 幕	第 四 幕	第 五 幕	第 六 幕	第 七 幕	第 八 幕	第 九 幕	エピローグ
5	10	52	71	113	137	186	237	279	327	385

装幀
山藤章二

珍
魂
商
才

開演

プロローグ

「ええ話がおまんのやが……」
鬚ひげの剃りあとが、まるで青黛せいたいでもつけたような凄味、とこうくれば、次いで深編笠の素浪人と思われる読者もあるだろうが、どっこい、これからはじまる物語は時代劇ではない。現代が舞台である。

主人公の名前は薔薇薔薇ばらばら之介のすけという。本名でないことは確かだが、さて、それなら彼の本名はといわれれば、作者の私にもわからない。生まれは昭和のはじめであるのは確かで、出生地は大

阪市内、それも西淀川区の歌島橋あたりというのだが定かでない。酒を屋台で汲み交わしていた時、彼が私に、出生地を不図洩らしたので、私は早速歌島橋の区役所に出かけてみて探してみたが、わからなかった。なにしろ、あの周辺は戦災で火の海と化し、中小の鉄工、印刷関係の工場も住宅も一夜にして姿を消した所で、役所の記録も殆ど焼滅していた。

「わい、淀川の堤防沿いに逃げましてなあ。朝になっても、まだ黒い煙があつたあたり一帯にあつたのを憶えてますで」

京都からやって来た満員列車が、ゴットン、ゴットンと淀川の鉄橋上で立ち往生したのを見たというからには、彼の言葉もまんざら嘘ではないようだ。が、ここで彼の言葉を鵜呑みにするのは、きわめて危険なのである。彼は、常に冷静な判断で相手の弱点を握ると、さも事実のように過去の物語を展開させてみせる。相手は思わず引きずり込まれてしまうのである。

「さやか。あんたは戦時中はルソン島でしたか。なんし、激戦の土地でおましたもんなあ。ところで、わてはあんた、ミンドロ島におりましたなあ。そう、ルソンの南の下のミンドロ島でおますがな。あの小さい島を、どんどん歩かされてなあ。バルアンからマンブラオ、それにサンタクルスからサピラヤン、最後はバコ山から反対側の海岸のピナマヤンと転戦に転戦でおます。転戦というたら世間体がよろしいけども、ま、敗走ということでおまんなあ」

ざっとこの調子なのだ。私は全くの出鱈目^{でたらめ}をいつているのではないかと思つて、ルソンの下のミンドロ島なる四国に毛の生えたような島を調べてみて愕^{おどろ}いた。彼のいった地名は確かにあるし、その足取りは正しいのだ。さてはミンドロ島の守備隊にいたのではないだろうかと思ふやうとし

て、ま、待てよと思うのだ。他人を疑つてはいけませんが、ミンドロ島で死守していた男が、何故西淀川空襲などを目撃しているかである。彼の分身が存在していない限り、これは絶対に不可能なことといわなければならない。

その点を追及してみると、

「ハ、ハ、ハ、そういうわけだな。ま、よろしいがな、過去のことなんぞは……」

と軽く一蹴（しゅう）してしまうのだ。

薔薇薔薇之介ことバラやんは、なかなかの美男子だ。眼に鋭さがあるが、鼻梁（はなすじ）は通り、口許は引き締まり、眉は秀でて、顎（あご）の下方に外国俳優によくみられる縦の切れが刻まれている。笑うと柔和になり、怒ると凄味が出て、動作は時に紳士的であるかと思えば、色ものの開襟シャツを肌けると野性味豊かな男に変貌し、外国航路の高級船員といっても誰も疑うものはない。感受性豊かな人物である。が、退社時などの勤め人の群れに入ると、バラやんは、孤立した男になってしまう。ある意味で、彼は外見も内面も個性的過ぎるのだ。

「バラやんは個性的な現代人やなあ」

というと、例のハ、ハ、ハの開放的な笑いをあげて、

「あんた、個性というのは、英語でいうたらパーソナリティ。人格も同じように、パーソナリティ。ところが、パーソナリティの語源を知ったはりまっか。本来はギリシャ語のベルソーナ。ベルソーナというてんな、ギリシャ悲劇に出てくる男の俳優がかぶる仮面、マスクのことや」

というのだ。つまり、人間の個性たるものは、仮面の下に隠されているものだという。これは

バラやんの人生観にも深く繫つながっているように思える。仮面の下に真の個性が隠されているのが人間なら、相手の仮面をひっぱがして商才を賭けようではないかというのだ。

「人間、なんで商売をするか。それは、人間の欲望ちゅうもんがあるさかいにや。そやけども……」

ここで一息ついで、彼は拳を握って力説するのだ。

「よろしいか。欲望もあんまり醜いのはあかん。醜い欲望を曝さらけ出して商売して金を儲けて、人間幸福にはならん。金があつたら幸福が買えるという奴が仰山ぎやうざんいよるさかいに、わいはこの世の中が嫌いやでエ」

それから一段と声を落として、

「そやけどもな、そら、わいかて、チョイチョイと人を欺だますけども、これは正当な理由がちゃんとおるわけやからな。欺された人間が、金を失うて、一時的でも、いやいや永久にやね、幸福の味をあじおうてくれということや」

という。

ベテン師、詐欺師、詐話師、大阪流にいうなら千三屋、千に三つの本当のことをいうからこの語が出来たのだが、バラやんのは、そのいずれにも属していないようなのだ。

「ま、なんですなあ。正義漢やねえ、わいは……」

と自負している。

このバラやんの自負を私は認めざるを得ない。

以前に松山沖で旅客機が海中に墜落して全員死亡という痛ましい事件があったが、その情報をキヤッチするや全国のベテン師たちが遺族に化けて松山に直行した。遺族に化けて空涙を流している、準備金五万円也が支給される。それに顎足代も入る。これを見込んで、バラやんの仲間の一人ローソクが松山に飛んで行き、金をせしめて戻って来た。ローソクの自慢話を聞いていたバラやんは、突如ローソクの襟許えりもとを引きちぎらんばかりにして、

「おのれ、それでもキンダマさげた男か。人間か」

と怒鳴りつけ、凄腕力どなでローソクの頭を柱にぶちあてたのだ。

「ひやァ、助けておくなはれノ」

ローソクは情けない悲鳴をあげて、両手で頭を抱え込んで畳に崩れた。

「その金、大阪府警に無名で寄付して来い。黙って置いて来い」

ざっとこういった調子なのである。

バラやんは、昨今流行のエドワード・デボノ博士の水平思考を読んで一笑した。

「なんやて。たいていの人は、自分自身の思考形態、思考過程をまったく認識していないものである。論理的思考をもってすれば、問題はかならずしも解けないということに気づかれるだろう。論理的な思考法とはまったく別種の、非常に効果的な思考方法が、このほかに存在するのである……か。なにいうてんのや、このおっさん。チャンチャラオカシイがな。こらクイズかアテモンやなあ。わいのは、一寸ばかり違うで……」

第一幕

第一場

バラやんは釜ヶ崎の簡易宿舎を出た。簡易宿舎といっても馬鹿にしてはいけない。三階建て、四階建て、なかには五階建てというのもある。不法建築臭いものもあるが、堂々と国道に沿っている。

バラやんは、よれよれのジャンパーの襟を立て、サンダルを履き、靴下には大きな目玉が二個所あいている。無精鬚もあたっていないし、髪はボサボサだ。少し猫背で、サンダルをチャラチャラ鳴らして歩く様子は、どう見ても、あぶれた労務者といった風情である。

「腹^{はら}拵^{ごしら}えだけはせないかなあ……」

はそつと呟く様子も、妻子に逃げられた男といった感じだ。

無精鬚に掌を当てながら、一膳飯屋の暖簾^{のれん}をくぐる。

「ここ、空いてまっか」

と低姿勢で空席を指す。

「空いてんがな。見たらわかるやろ。見てわからん者はな、聞いてもわからんのじゃ」

大阪人はどうも早口の上に言葉が多過ぎるわいとバラやんは思う。

「へ、えらいすんまへんな」

バラやんは肩身のせまいといった恰好^{かつこう}で、ひっそりと腰をおろして、豚汁と丼飯^{どんぶり}を注文する。店内には朝の活気というものが溢^{あふ}れている。大声で労賃の不足に文句をいう男もあれば、大砲のように屁をぶつ放して、おまけに欠伸^{あくび}をながたとする男もいる。隅では特飲街の接客婦同士が、昨夜の客の批評をしながら鯖^{さば}の煮付けを食い、鉢巻きをした五十年輩のおっさんは、豆腐を肴^{さかぬ}に一合瓶をコップに注いで広沢虎造の一節を唸^{うな}っている。あらゆる人生の縮図があるようだ。

バラやんは、映^{うつ}りの悪い棚の上のテレビから視線をおろして、おやっと首をひねった。
青白い顔の女の子が母親らしい女と話しているのだ。

「そないいうたかてな、病院で診^みてもらいうても、うち健康保険たらいうもんあらへんさかいに……」

これは娘の方だ。

「そうかてな、おかあちゃんは心配やがな。体が第一やさかいにな」

「うん……」

なにかいいかけて、娘は空咳を繰り返した。

肺結核やないかいな、とバラやんは考えた。赤といっても朱色に近い毛の剥げたトッパコー
トに下駄履きといった娘の姿から、バラやんは通天閣界限の一杯飲屋で働いている女だと睨んだ。
母親の方は繕ぎのある古い銘仙に割烹着をつけ、膝に風呂敷包みをかかえている。娘の髪は赤茶
けていて、櫛巻のようなスタイルで、それも無惨にくずれているのだ。

「健康保険がないか……」

バラやんは呟いた。

「そうか……」

なんとしても不合理の世の中やないかとバラやんは憤りをおぼえた。会社で働いてる者にはあ
って、臨時で一所懸命働いてる者には、その特典がないのが解せなかった。母親の風体から見
近く、近頃のビルの清掃係かなにかやっているのだろう。彼が、そういう想像を巡らせている間も、娘
の方は空咳を繰り返した。

「ようッ」

とんと勢いよくバラやんの前に豚汁と飯が並んだ。玉葱の輪切りが脂のギラギラ浮き出す赤味
噌の汁の上にあり、コンニャクも顔を出していた。五十円としては栄養価が満点であるといえた。
湯気を吹きながら、汁を吸うと臍物にまで熱さが浸み込んだ。箸の先で汁の底を掘りあげると、

乱暴に角切りにされた豚肉が出てきた。

「人工肉やないやろな」

彼は人工肉が石油からつくられるという週刊誌の記事を読んでから、人工肉には恐怖を覚えていた。深い理由はないのだが、人間が石油で育っていくのが、現代の地獄絵のように思えるのだ。しかし、人工肉ではなかった。その証拠は、荒っぽく料理された角切り豚の皮の部分には、正確に一つの毛穴から三本ずつの豚の毛が生えていた。

「なんば人工肉でもやな、毛を生やすやてせえへんわいな」

彼は勢いよく咀嚼した。とろりとした脂の部分と歯ごたえのいい赤味の部分が舌の上に躍った。食べながらも、彼の耳は、背後の母娘の動静に注がれていた。

「おかあちゃんもな、仕事に出てても、お前のことが心配でな、仕事を手につかんのやで」

「大丈夫やて、おかあちゃん。なんにも心配することはあらへん……」

娘は強いて元気よくいったが、その言葉の調子には、虚しさと自棄気味なものが含まれていた。

「よっしゃ、任しといて……」

バラやんは、勢いよく飯をかきこみ、豚汁を八分目まで吸いあげ、最後に残った豚肉に歯型だけを入れると、素早くポケットから小さな物を取り出して、その歯型の中に押し込んだ。

「こおっと、こっちが裏でっか」

バラやんは調理場の裏にまわって行った。

「あの……」

「なんじゃい。うるさいな」

「御主人、いたはりまっか」

「なんの用や」

「一寸、いいたいことがおましてからに……、店のことで……」

「社長ノ」

若い衆が奥に向かって叫んだ。バラやんは斜視をよそおう気味に、顔を斜めにして、奥の方を見た。

「なんや」

肥満体のシャツ一枚にドンブリ腹巻きをした経営者が出て来た。若い衆が顎でバラやんを指した。親父は胡亂氣な眼差しでバラやんを見下した。バラやんは、ますます怯えを見せた小鼠の姿勢をとった。相手が居丈高になるのを心待ちにするといった感じである。

「なんやい。忙しいのや。用があったら、さっさと早よいわんかい」

はたして、相手はバラやんを呑み込む調子で出てきた。

——ほれ、かかりよったで……。

手応えがあれば、ただちに手繰り寄せろのだ。

「あの、今ね、お宅で豚汁の五十円のやつを食べましたんや」

「うん、それがどないしたんや」

「へ、ほなね、豚肉の中に、カチッと当たるもんがおましてねえ……」